

日本で感じたこと

工学部留学生

シャヘン ディ コスタ
Shahane De Costa

Ayubowan 今日!

2年半前に来日したとき、私は「こんにちは」とか、「ありがとう」といった片言の日本語しか話せませんでした。初めて触れる日本の文化や生活様式の中で一人の知人もなく FOREIGN, STRANGER 等の意味を改めて実感するようになりました。また、日常生活の中で、おはじで食事をする事になり、これにはたいへん苦勞をしましたし、味も違いました。ほんとに、すべてが違ったのです。どうしていいのかわかりませんでした。大学への行き方、どこに学食、レストランや郵便局があるかなどすべて一から教わらなければなりませんでした。

一日、一週間、一か月、一年と時がたつにつれ、先生方、ホストファミリーや友達の御援助とホームステイプログラムや他の相互理解プログラム等によって、私は日本の生活に慣れてきました。そして今では日本文化や日本人社会に違和感なく暮らしてゆけるようになりました。鏡の中の私も皆と違っている“エイリアン”とは思えないのです。まあ、外国人登録証にはそう書いてありますが…。

日本も日本人も来日前に想像していたもの

とはまったく違っていました。電化製品や車を除けば、スリランカでは日本に関する情報は西洋諸国に比べてあまりなかったのです。日本の交通機関が時間に正確なことにはずいぶん驚きました。昼やさしみを見たのは初めてでさしみを最初に食べた時にはどうしてこんな物が食べられるのかと思ったものです。ひょっとしておなか痛くなるのでは、と心配でした。しかし今では好んで食べるようになり、ほんとうによく言うように、慣れたものは好きなものです。

この2年半はほんとうに楽しい思い出でいっぱいです。この期間に獲得した膨大な知識と経験は私の大切な財産になるでしょう。この期間は私にとって言語や国籍の障害を乗り越えて、多くの友人を得た期間でもありました。

世界中に知られたこの歴史に名を残す広島にある広島大学に学ぶ機会を与えていただき心よりお礼を申し上げます。この美しい広島、日本、そして素晴らしい人々がいつまでもそうでありつづけるよう祈っております。

